

世紀転換期における日仏文化交渉史（1890 1920年代）：フランス美術行政にみる日本美術観を中心に

著者	林 久美子
学位授与年月日	2016-04-28
URL	http://doi.org/10.15083/00075110

論文の内容の要旨

論文題目：世紀転換期における日仏文化交渉史（1890 - 1920 年代）
——フランス美術行政にみる日本美術観を中心に——

氏名：林 久美子

本論文は、世紀転換期（1890 - 1920 年代）における、日本とフランスの文化的接触を文化交渉史として捉えようとするものである。とりわけ、1900 年までは、日仏の接触が文化交渉と呼ばれるべき状態に至るまでを確認し、20 世紀初頭においては、文化交渉という枠組みの中で、フランス美術行政を中心とする、フランスの公的組織において、日本美術がどのように認識されたのかを中心に検討した。よって本論文は、連関した二つの主題を持って構成されている。19 世紀末に誕生した日仏の文化交渉とは如何なるものだったのか、そして、日仏文化交渉を土台とした、20 世紀初頭のフランス美術行政における日本美術観とは如何なるものだったのかという二点である。

この二点について検討する際、根底に存在するのは、19 世紀後半のフランスを席卷した日本趣味、ジャポニスムという問題である。19 世紀後半のジャポニスムブームがどのように日仏文化交渉へと結節するのか、あるいは、20 世紀初頭のフランス美術行政において、衰退後のジャポニスムはどのように関わっていたのかを考察することもまた、本論文の目的となっている。

本論文の対象時期である世紀転換期（1890 - 1920 年代）の日仏文化関係といえば、1900 年のパリ万国博覧会をはじめ、多くの事例が研究されていると思われがちであるが、意

外にも世紀転換期に限っては、なぜか今まで手薄の状態が続いてきた。これはちょうど、先行研究の空白期間、エアポケットのような状態に陥っているからだと考えられる。日仏関係の黎明期（幕末～明治初期）ほどの文化的興味は薄れ、ジャポニズムも終着地点を迎えた 1900 年、そして、第一次大戦後の日仏接近の機運や、藤田嗣治らの活躍が見られた 1920 年代という両期間の谷間にあたっているのである。しかし、この世紀転換期は、世界第二の植民地保有国として、帝国主義列強の中での自己再規定を図っていたフランスと、日清・日露戦争を経て、帝国主義列強の仲間入りを果たそうとしていた日本という、両国の時代状況を反映し、複雑な文化的交差の見られる極めて興味深い時期だと考えられる。そこで本論文では、政治と文化が密接に絡み合った日仏の文化的接触、すなわち日仏文化交渉と、フランスの公的組織における日本観という二つの観点から、この時期を捉え直すことを試みる。

この二つの観点に則って、本論文は III 部構成をとってはいるが、おおよそ前後半の二つの部分に分けられる。章立ては、緩やかに時系列順となっており、1900 年について述べた第 II 部をちょうど重複部分として、前半部（19 世紀後半）・後半部（20 世紀初頭）としても捉えられるように構成されている。

第 I 部では、19 世紀後半のジャポニズム隆盛の時代から、19 世紀末の日仏文化交渉の時代に至るまでを、フランス人挿絵画家フェリックス・レガメー（Félix Régamey 1844 - 1907）の活動により辿る。レガメーは、ジャポニズムという芸術思潮においても、19 世紀の日仏関係においても、決して中心的な人物とは言い切れないが、ジャポニズムブームから、文化交渉の時代へという流れにおいて、その起点にも終点にも関わっている稀有な人物である。私人とはいえ、公的な組織と民間とを繋ぐ存在であったレガメーの活動を検証することによって、日仏文化交渉の萌芽が生まれた過程を捉えられると考える。

第 1 章では、まず導入として、これまでの先行研究を踏まえ、フランスにおけるジャポニズム、日本美術愛好の始まりと発展を概観する。中でも 1867 年の時点で、早くも日本美術について論じ、その後のジャポニズムの理論的基盤を形成したとされるエルネスト・シェノー（Ernest Chesneau 1833 - 1890）の言説を取り上げ、日本美術が特にフランスの装飾美術に及ぼした影響について確認する。また、第 2 章以降の主要な人物の一人であるレガメーの諸活動の基盤となった、1876 年の第一回来日についても、第 1 章で概観する。

第 2 章では、第一回来日後のレガメーの活動として、特に文学的側面を取り上げる。レガメーは、著書『お菊さんのバラ色ノート』*Le cahier rose de Mme. Chrysanthème*（1894 年）に見られるように、常にピエール・ロティ批判を行っていた。ロティの『お菊さん』

が西欧世界で人気を博したことは周知の通りだが、その一方で、レガメーに代表される同時代のフランス人たちのうちに、ロティ的オリエンタリズムを批判し、再考を促すような動きがあったことを明らかにしたい。レガメーの継続したロティ批判が目指したものは何だったのか、彼が抱いた日本観とはどのようなものだったのかを確認する。

第3章で取り上げるのは、レガメーの第二回来日時（1899年）の足跡と、図画教育視学官としての活動である。彼の旅行記と共に、新資料によって来日時の行動や、日本の美術界に対する見解、様々な美術家たちとの実際の交流の様子などを明らかにしていく。フランス美術行政の一環として、レガメーは来日し、図画教育視察を行っている。この時代のフランスにとって、やはり日本は産業芸術、装飾美術に資する図画教育の面で、無視できない存在であったのだろう。19世紀最後の年に来日したレガメーは、滞日中に多くの人的交流を持ち、20世紀からの日仏文化交渉を準備することになる。

第II部では、1900年という年そのものを、日仏関係における重要な転換点としてクローズ・アップしたい。1900年のパリ万国博覧会において、ジャポニズム的日本美術観の修正を迫る、官製の日本美術史が日本側から提示され、そして同じパリ万博を契機として、日仏文化交渉の舞台となる、パリ日仏協会が創設されたのである。

第4章では、このパリ日仏協会の創設から最盛期までを取り上げ、日仏文化交渉とは一体何だったのかを明らかにする。レガメーが発起人の一人として設立に携わり、彼の最後の活動の場となった日仏協会は、その存在は知られつつも、これまで研究がなされてこなかった組織である。半官半民のこの組織には、外交官、政治家、収集家、商人、ジャーナリストなど日仏のさまざまな人材が集っていた。そこで繰り広げられたものこそが、政治と文化の密接に絡み合った日仏文化交渉と言えるだろう。

第5章も同じく、1900年を舞台としたパリ万国博覧会の、とりわけ日本の出展方針について考察する。ジャポニズムの影響もあり、日本の美術工芸は、常に万博において高い評価を得ていたが、と同時に、日本の美術作品すらも工芸品として分類されてしまうという長年の懸案が、当時の日本には存在していた。日本にも西欧における「美術」が存在すると主張し、美術史と同時に国の歴史、そしてアイデンティティをもアピールするという目的をもって、万博で日本古美術展が開催され、初の官製日本美術史が刊行された。この『稿本日本帝国美術略史』は、これまでも多くの先行研究で取り上げられているが、日本古美術展そのものを詳細に検討したものはない。今回、新聞、雑誌などのメディア分析を行い、日本古美術展の実態とともに、フランスにおける受容について、初めて詳細に検討した。ジャポニズム的日本美術観に対して、古美術展によってなされた是正が、その後の20世紀のフランスにおける日本美術観にいかなる影響を与えたのか、それとも与えなかったのか、本章が第III部以降の考察の基盤となっている。

第 III 部では、20 世紀初頭のフランスの公的組織において、どのような日本認識、日本美術観が形成されていたのかを検討する。そこで取り上げるのは、実際の展示によって、フランス美術行政の日本美術観を提示していたルーヴル美術館と、フランスのアジア地域研究機関として設立されたフランス極東学院である。

第 6 章は少し時代を遡り、ルーヴル美術館への日本美術導入に大きな役割を果たした二人の立役者、ガストン・ミジョン (Gaston Migeon 1861 - 1930) とレイモン・ケクラン (Raymond Kœchlin 1860 - 1931) が、日本美術と出会った 1890 年から始める。ルーヴル美術館の日本美術室は、多数の浮世絵の寄贈により、1893 年に開設されたとみなされてきたが、実際の状況は如何なるものだったのか。国立美術館古文書館の新出資料と、今回新発見の多数の新聞資料により、開設当時の様子を正確に把握することを目指す。開設時に、美術工芸部門、極東美術室に位置付けられた日本美術は、その後の 1900 年万博や、ミジョンの日本視察 (1906 年) を経て、変化を見せたのだろうか。「美術工芸」「極東美術」として認識され、フランスの美術行政の内に公的に組み込まれた日本美術の行く末を、ルーヴル美術館における極東美術室の歴史を辿ることで再現した。

終章では、1900 年パリ万博の日本古美術展評を執筆して、日本研究者としての第一歩を踏み出したクロード・メートル (Claude-Eugène Maitre 1876 - 1925) を取り上げる。ジャポニズム的日本美術観から脱却したメートルは、日本美術を美術工芸や装飾美術のみによって捉えることはせず、最初から、日本美術における古代の仏教美術の重要性を指摘していた。フランス極東学院の研究者として、幅広い分野の日本研究に取り組んだメートルの活動を、新資料により明らかにしていく。20 世紀初頭のポストジャポニズム時代において、フランスの公的組織における日本認識には、ジャポニズム時代と変わらぬ「美術工芸」や、あるいはフランスのインドシナ支配とも密接に関わった「極東」という概念、この二つの符号が付き纏っていた。最終的に、この二つ符号を外すことに成功したメートルが目指した、新たな日本学とは何だったのかを最後に確認してみたい。